

実践報告

ワークショップ「ペアレントエデュケーションの理論と実際」

日本における Parenting Education の可能性

小嶋 理恵子¹⁾・斎藤 真緒²⁾

Workshop: Theory and praxis of parenting education — The possibility of parenting education in Japan —

KOJIMA Rieko and SAITO Mao

Today, it is thought necessary to support early parent-child relationships, consider public support of child care, and provide concrete support programs. Workshops for professionals on “The Theory and Praxis of Parent Education” were held in Ritsumeikan University, on three occasions between November 2001 and May 2002. The workshops were based on Parenting Education in Britain. In this paper, we review studies of Parenting Education in Western countries and the associated theoretical problems, and discuss antenatal education as Parenting Education. Then, we review the three workshops and consider the possibility of Parenting Education in Japan.

Key words : Parenting Education / Parent Education, Changing Childbirth, communication skill, maternity care

キーワード : ペアレンティング・エデュケーション / ペアレント・エデュケーション, Changing Childbirth, コミュニケーション・スキル, 周産期ケア

はじめに

最近, 地方自治体と専門機関, あるいは母親自身など, 様々なレベルでの子育てのための「ネットワークづくり」が目ざされていると同時に, 乳幼児期の親子関係への支援が重視されている。

また, 児童福祉の領域では, 児童虐待が社会問題化する中で, 「親教育」や「親支援」の必要性が叫ばれ, その援助方法が模索されはじめてきている。現在, 日本での「子育て支援」は, こうした出産後の親子関係を対象としたもの

や, 虐待への取り組みが中心である。しかし, 親にとって, 子どもとの関係は, 子どもが生まれてから始まるのではない。長期的な視野から捉えるならば, 妊娠以前からの, 人間の生涯発達という観点にたった, 一貫した親性・養護性育成への支援が重要である。子育てにかかわるスキルを学ぶ機会が枯渇しつつある現代社会においては, 出産準備教育などを通じた「親になる過程」への援助だけでなく, あらゆるライフステージにおける, 個人の性的発達への援助という視点も必要である。こうした援助を考えていく際に, 家族の変化やセクシュアリティの多様化といった問題も避けられない。「将来の親」も射程に入れた包括的援助は, 欧米では一

1) Canging Childbirth 研究会代表 / 助産師

2) 立命館大学衣笠総合研究機構ポスドクトラルフェロー

般的に、「ペアレンティングエデュケーション (Parenting Education)」あるいは「ペアレントエデュケーション (Parent Education)」(以下 P E) と呼ばれている¹⁾。

日本では、親への援助として取り組まれている教育の一つとして、妊娠中の女性やカップル、家族などを対象にした出産準備教育をあげることができるだろう。最近では、専門雑誌で出産準備教育に関する特集が組まれる程、周産期領域の援助者からの様々な実践報告が寄せられている。それらの報告の共通点は、従来のお産準備教室における一方的な講義形式ではなく、参加型、体感型、あるいは小グループ制によって、「当事者主体」の援助を行っていくというものである²⁾。しかし、欧米の P E のように、包括的な援助としての位置づけが必ずしも明確になされているわけではなく、まだ部分的な取り組みにとどまっている感が否めない。

Changing Childbirth 研究会 (以下、C C B 研究会) は、欧米、とくにイギリスの P E を参照しながら、日本における P E の具体化・開発を、実践および研究の両面から進めている。今回は、欧米の P E の動向と、この間実践してきた出産準備教育のワークショップを紹介することを通じて、日本における P E の具体化の方向性を探るひとつの手がかりとしたい。

1. P E とは何か

1-1 イギリスにおける P E

欧米では、非常に多種多様な P E がある。アメリカでは、1960年代から心理学を中心とする理論に基づいて、P E が展開されてきた³⁾。またイギリスでも、1980年代以降、当事者である親自身の自助グループといったボランティアセクターを中心に、P E が広がりつつある (Einzig, 1999)。イギリスの自助グループを中心とする P E の展開は、1993年の政府の出産

政策の転換 (Changing Childbirth) に結実している。ここでは、3つの C、つまり Choice (選択)、Control (他コントロール)、Continuity (継続性) が、周産期ケアの基本方針として提唱されている。以下では、イギリスの P E の動向とその特徴を見ておきたい。

P E とは、「親、あるいは将来の親が、自分自身及び子どもの社会的・情緒的・心理的・身体的ニーズを理解し、両者の関係を高めることを援助するための一連の教育的、支援的活動」(Pugh, 1994, p.66) と定義されている。P E は、地域コミュニティを基盤とした子どもの発達および子育てのためのサポートイブな生活環境創出の一環として位置づけられている。つまりペアレンティングとは、連続的過程であり、一人の人間の発達にかかわる、親、地域、学校などを含む相互行為過程の総体なのである。

イギリスの P E の基本的な構成要素としては、以下の4つが挙げられている。

- ・ 情報
- ・ スキルの学習
- ・ 経験の共有
- ・ 過去を振り返る機会 (Einzig, 1999, p.24)

イギリスの P E は、親のスキルの欠如を指摘・指導するのではなく、むしろ、親をエンパワメントすること、親の自尊感情を高めることを基本原理としている。したがって、親に対するサポートと、ペアレンティングに対するサポートは重複する。しかしこの2つのサポートは、戦略として異なる目標を持っている (Einzig, 1999)。親へのサポートは、親個人としての生活全体 (パートナーとの関係、仕事とのバランスなど) への援助を目的としているのに対して、ペアレンティングへのサポートは、子どもをめぐる人間諸関係全体を射程にいれなければならない。したがってその対象には、親のみならず、子どもを取り巻く関係すべてが含まれる (祖父母、きょうだい、学校の先生など)。また、P E の

プログラムは、対象者の特定のニーズや状況に即した内容(ジェンダー、セクシュアリティ、父親を対象としたプログラム、仕事との両立の問題、二人目の子どもの出産、再婚カップル、シングルペアレント)(Fine, 2000)をその特徴としており、一般的な内容では効果がないとされている(柏木, 1993)。

最近では、初期のアメリカで主流を占めていた医学モデルを基盤とする行動修正を目的とした「ペアレントトレーニング」と意図的に区別して、PEが用いられる場合がある(Long, 1997)。またPEプログラムのキーワードとして、予防(prevention)や介入(intervention)だけではなく、促進(promotion)や治癒力(resilience)といった、親あるいは子ども自身が持っている資質・能力に依拠したアプローチが注目されている。児童虐待などの援助実践の場面では、しばしば「予防」が注目されているが、「予防」はともすると、あるべき親としての振る舞い方を固定化し、親に対するさらなるプレッシャーとなる可能性も含んでいる。この他にも、現在イギリスでは、コストの問題、調整的なサービスデリバリーの欠如、政策レベルにおける包括的プランニングの欠如など、PEをめぐる新たな課題が浮上している。

1 - 2 PEの理論的位置づけ

欧米のPEは、多様な理論的基盤に依拠しているが、PEが登場した社会的背景として、親であることの社会的意味づけが大きく様変わりしてきたことを指摘できるだろう。PEとは、ジェンダー論と「近代家族」論とがインターフェイスする領域なのである。ここでは、こうした社会的コンテキストを明確にするために、ジェンダー論と「近代家族」論という、2つの問題が重なり合う領域としてPEを捉え、その理論的課題について考えてみたい。

ジェンダー論

フェミニズムは、ジェンダーという視点をもちつつも、常に「産む性」(セックス)としての女性をどうみるかという問題と向き合い続けてきた。近代のフェミニズムが問い続けてきたのは、「産む性」としての女性の身体に付与されてきた「母性(motherhood)」,そして「母性愛」(「パーフェクトマザー」)という神話である。1990年代以降、ジュディス・バトラーらによってもたらされた「社会構築主義」という視点(Butler, 1990=1999; 上野, 2001; 荻野, 2002; 竹村, 2002)は、フェミニズムにおける「身体」観にも大きな影響を及ぼしている。今、フェミニズムは理論的転換点を迎えている。

しかしこれは、フェミニズムがずっと抱えてきた「産む性」という問いの折り返し地点にすぎない。身体に対するまなざし、とりわけ「性的身体」に対する社会的・政治的なまなざしが、その効力を発揮するのは、「産む」ことにかかわる周産期の場面である。社会構築主義という視点から、「産む」という身体経験をどう捉えなおすのか。ともすると社会構築主義は、その批判の対象である「本質主義(essentialism)」を敬遠するあまり、「本質主義」の権化として捉えられがちな「身体」、とりわけ「産む」ことをめぐる個々の経験を、「宙づり」にしたままにする可能性も孕んでいる。こうした傾向は、フェミニズムからのPE研究にしばしば見受けられる傾向である(Marshall, 1991)。

むしろ、社会構築主義を経由して、様々な「生きられた身体」の有り様、さらには援助のあり方を考えるスタートラインについたと考える方がよいのではないだろうか(金井, 2002)。生殖技術・言語・慣習などによる身体への管理・統制を通じて、「産む」という営みは、単に多様化しているのではなく、「重層的に差異化・差別化」(金井, 2002, 22 - 23頁)させられている(「産めない」「産まない」「血がつな

がない」「ホモセクシュアリティ」など)。ジェンダー論という観点からPEの理論的課題を考える場合に、こうした身体という磁場において生じているポリティクスとどう向き合うか、また痛みや感情という「質量」をともなって経験される「産む」という経験を、リアリティをそこなうことなく理論化することが求められている。

また、「産む」という身体経験に過剰なほどの意味付与をしてきたことがもたらしたもうひとつの帰結として、もう一つの性である男性のセクシュアリティや男性のペアレンティングが軽視され、言語化されてこなかったことを指摘できるだろう。このことは、リプロダクティブ・ヘルスについての従来の理解が、女性の問題に大きく傾斜していることにも典型的に示されている。「男性のリプロダクティブ・ヘルス」も、PEにとって重要な理論的課題といえるだろう。

「近代家族」論

「近代家族」は、セクシュアリティと生殖を結びつける物語・秩序である。「近代家族」論は、ジェンダー論の知見を活かしながら理論的發展を遂げてきたが、それゆえに男性と女性との関係性に傾斜しがちであり、家族のもう一つの構成要素である、親と子どもをめぐる問題は、十分展開されてこなかった。ジェンダーに傾斜しがちな家族のあり方を、親子という視点から捉え直す作業が、PEの理論的課題としても求められている。

「近代家族」における親と子との関係性、とりわけ、小さな子どものケアをめぐる関係性は、従来、初期母子関係をモデルとしてきた（理念としてのマザーリング）⁴⁾。その理論的結晶が「アタッチメント」理論である。さらに田間泰子（2001）が指摘しているように、「近代家族」における親子関係は、血がつながった「実子」

を暗黙の前提としている（田間，2001：Phoenix, 1991）。こうした親子関係モデルやそこで想定されているケアモデルは、それ以外の親子関係やそれ以外のケアモデル（父子関係、血のつながらない親子関係）を「逸脱視」する傾向がある。また、出生前診断などの生殖技術の発展は、「パーフェクトベビー」神話と一体となっており、障害を持つ子どもの親へのケアの遅れの一因となっている。また、誕生死へのケアの問題も取り残されたままである。今日の周産期ケアが直面している家族の多様化・複雑化への対応、子どもの障害や死産をめぐる親へのケアといった課題を念頭におくならば、「パーフェクトマザー」や「パーフェクトベビー」といった神話が染み込んでいる「近代家族」という物語が及ぼす弊害は、大きいと言わざるをえない。こうした問題への一つの理論的とり組みとして、例えば近年、イギリスのPE研究では、「近代家族」論が前提としているケアモデルの問い直しの一環として、アタッチメント理論の再構築が模索されている⁵⁾。多様な家族関係へのケアについての実践的とり組みと同時に、こうした理論動向にも今後注目していく必要があるだろう。

1-3 ペアレンティングエデュケーションとしての出産準備教育

出産準備教育は、妊娠中の女性とそのパートナー、その他の家族などを対象に行われている。イギリスでは、前述したように、当事者グループを中心に、親になる人は、成長過程の中で、問題解決していく能力を培った人であるという認識に立ち、未知なる体験である妊娠・出産・子育てに対して、これまでの問題解決スキルを応用し活用していくことができるような情報の提供、サポートを展開してきている。また、当事者にとって、従来の妊娠中の生活と出産に比重を置きがちだった教育のあり方は、子どもが

生まれてからの自分たちの生活を、創造的に考察することが出来にくいという指摘から、PEを重視した教育やプログラムの検討が行われている(Nolan, 1998)。そして、具体的なワークは、以下に挙げたようなトピックスを主眼において実践されている。

- ・パーフェクトベビー、パーフェクトペアレントといった神話から解放すること
- ・パートナー間のコミュニケーションを良好にすること
- ・問題を解決する能力
- ・ソーシャルサポートについて教えること
- ・産後の感情の落ち込みについて
- ・出産に関する喪失と悲しみ
- ・産後の性生活
- ・仕事への復帰

さらに、男性に対しても、従来のような、産む女性のサポートとしての役割を重視するだけでなく、男性自身の持つニーズに対応するために、ピアサポートグループを活用したワークも行われている。また、援助者向けの実践マニュアルでは、教育や、教室を運営する援助者自身のジェンダー意識、セクシュアリティに対する認識を問い直す視点も提供されている(Priest, Judy, et al., 1991)。

2. ワークショップ「ペアレントエデュケーションの理論と実際」

2-1 CCB研究会の設立経緯

CCB研究会は、2001年9月、イギリス在住の助産師、夏目奈緒子さんがコーディネーターするイギリス助産師研修に参加した助産師4人が結成した。その後、この研究会の主旨に賛同した研究者や助産師たちとともに、日本におけるPEの具体化・開発、とりわけ出産準備教室のPEとしての再構築を活動の主軸としてきた。前述したように、日本における出産準備教

育も変化してきてはいるが、当事者主体のケアをしたいがどうしても分からないというジレンマを抱えながら働いている援助者も多い。そこで、2001年12月から2002年5月までの計3回にわたって、立命館大学人間科学研究所学術フロンティア推進事業「対人援助のための人間環境デザインに関する総合研究プロジェクト」の中の「家族プロジェクト」(代表：中村正立命館大学応用人間科学研究科教授)への企画協力という形で、夏目奈緒子さんを講師に招き、援助者対象のワークショップ「ペアレントエデュケーションの理論と実際」を開催することにした。夏目さんとの事前打ち合わせにおいて、「当事者の産む力を引き出す」ために、出産準備教育としてどのようなプログラムを提供したら良いのかを、援助者自身が考え、作り出していくことができる場(「援助者の援助の力を引き出す」)にしたいということを確認した。

2-2 ワークショップでの取り組み

開催したワークショップには、助産師教育、施設助産師、開業助産師、保健師などそれぞれの領域で働く援助者35人が参加した。ワークショップに参加した35人に、出産準備教室に対するアンケートを実施した結果(30人が回答)、19人が出産準備教室を講義型で行っているあるいは行っていたと回答し、既存の両親教室について悩んだり、迷っていると答えた参加者も多かった。そこで、毎回アンケートの中から、参加者自身の知りたい内容や疑問を夏目さんに伝えながら、次回のワークを構成するという方法をとった(ワークショップ全プログラム一覧と、ワークの一部内容については表1～表4を参照)。

今回のワークショップについて、PEの観点、とりわけイギリスのPEの4つの構成要素(スキルの学習、経験の共有、過去を振り返る機会)という点から、再検討してみたい。

【表1 ヘアレントエデュケーションワークショッププログラム一覧】

<p><第1回 2001年12月></p> <p>*ねらい</p> <p>Changing Childbirth政策を機に、「当事者主体」へとケアのあり方が変わったイギリスの実態報告から、援助者自身が、自分の持つ援助観への問い直しを行う機会を提供する。</p> <p>*ワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 - 1 . イギリスのマタニティ政策と助産婦の変化 1 - 1 - 1 . Changing Childbirth政策 (1993) 1 - 1 - 2 . イギリスでの出産準備教室の変化 1 - 2 - 1 . 従来のお産準備教室とこれから目指す教室との違い 1 - 2 - 2 . ファシリテーターの役割 1 - 3 . 当事者の力を引き出す教室運営の実際 1 - 3 - 1 . 自己紹介および他己紹介を通じたコミュニケーションモードへの理解 1 - 3 - 2 . パースラインをつくるグループワーク <p><第2回 2002年3月>⁶⁾</p> <p>*ねらい</p> <p>母乳育児に対する当事者グループが日本各地で作られている。当事者が望む母乳育児のサポートとはどういったものなのか。参加者がこれまで行ってきて情報の提供のあり方を検討し、効果的な情報の提供のあり方を学んでいく機会にする。</p> <p>*ワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> 2 - 1 . コミュニケーションスキル/コミュニケーションモードを考える 2 - 2 . カードゲーム (母乳と人工乳のメリット・デメリット) 2 - 3 . プレゼンテーション能力を高めるグループワーク <p><第3回 2002年5月></p> <p>*ねらい</p> <p>これまでのワークを通して、参加者自身が考え、学んできたことをプログラムとして形にする。</p> <p>*ワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> 3 - 1 . 出産の当事者は誰か? ~親の立場, こどもの立場から考える 3 - 2 . 出産準備教室プログラムづくり (グループワーク)
--

まずワーク例 (表2)は、情報伝達にかかわるファシリテーターのあり方を考えるものである。人によって、理解しやすいコミュニケーション・モードは異なっている(声、ビジュアル、ジェスチャー、文字など)。ファシリテーター自身が、自分が出産準備教室で用いているコミュニケーション・モードの特徴を知ると同時に、準備教室への参加者がどのようなコミュニケーション・モードを使っているか、また、どのようなコミュニケーション・モードを用いると、参加者に効果的に情報を伝達することが

可能になるのかを意識化することが重要となる。参加者によってコミュニケーション・モードを使い分けることによって、出産準備教室に参加しやすく参加者自身も発言しやすい雰囲気がつくられ、参加者とファシリテーターとの交流も活性化される。

ワーク例 (表3)は、出産時の身体的変化や、その時の感情の変化(ポジティブな感情、ネガティブな感情)、さらにはパートナーのかかわり方を、わかりやすく理解するためのものである。このグループワークは、ワークショップ

【表2 ワーク例】

コミュニケーションスキル/コミュニケーションモードを考える(2-1)

- 【目的】 援助者がクラスを運営していくときに、相手の反応からどんなコミュニケーションモードを用いたらよいかを選択できる力をつける。
グループを運営していくうえで、参加者が質問をしやすくなる雰囲気、きっかけづくりになる(質問をする力を引き出す)
- 【準備】 10人程度のグループをつくる
ある状況を写した写真あるいは絵、白い紙、ペンを用意する
- 【作業】 情報の伝え手は、かならず言葉を使ってその写真や絵を説明する。情報の受け手は、その言葉での説明を聞きながら、その写真をイメージし絵に書いてみる。
イメージできないところを情報の伝え手に質問しながら絵を完成する。
写真・絵を見て、自分のイメージ通りだったか、あるいはどこが違っていったかを話し合う(伝え手は、どういうところが伝えにくかったのか、受け手はどういうところが、イメージしにくかったのか)。
情報の伝え手、受け手の両方を経験してもらうとより深まる。

【表3 ワーク例】

パースラインをつくるグループワーク(1-3-2)

- 【目的】 出産のメカニズム、自分の身体の変化とその対応について、当事者が理解しやすいような情報提供を行う。当事者が、出産のメカニズムを理解でき、その時の自分の身体の変化、対応について理解できる。また、パートナーがそのときにどんな援助ができるのかを理解する
- 【準備】 10人程度のグループをつくる
出産のメカニズムのカード(女性用と男性用で色を分ける)を用意する
<今回使ったカードの内容>
下痢をする ・生理痛のような痛みを感じる ・陣痛が10分毎にくる ・興奮する ・少しあせっている
ので、深呼吸をして落ち着く ・家族などに連絡をする ・病院へ行く ・陣痛が止まる ・歩き回
る ・軽食を食べる ・音楽を聴きながらリラックスをする ・陣痛が30秒ほど続く ・陣痛の合間
にうとうとする ・椅子などにもたれる ・陣痛が2分ごとにくる ・腰が痛い ・よつんばいになる
陣痛が1分ぐらい続くようになる ・気分が悪くなる ・お風呂に入って気分転換 ・陣痛が強くなる
・強い腰の痛みを感じる ・腰などを暖める ・破水 ・触らないで欲しい・仙骨のあたりが痛くなる
・まだいきみたくない ・陣痛がずっと続いているように感じる ・もういきみを我慢できない ・足
が震える ・いきむ ・赤ちゃん誕生 ・感動する ・少し水分を補給し、リラックスする ・一人
ではいられない ・足が冷たく感じる ・体があつい ・恐怖を感じる ・もう限界だと感じる ・家
に早く帰りたい ・痛い ・パニックになる ・助けて!! ・すごく興奮する ・汗でべたべたする
(その他、追加することもOK)
- 【作業】 グループごとに、話し合いながら、カードを並べ替え、パースラインを完成させ、発表する

【表4 ワーク例】

出産の当事者は誰か? ~親の立場、こどもの立場から考える(3-1)

- 【目的】 自分たちが子どものころ、どんな親を望んでいたかを考えることによって、当事者自身が、親としての自分を振り返ることができる
- 【準備】 二人のペアになる
- 【作業】 自分は小さいころ親に言われていやだったこと、今の子どもはどんな親を望んでいるのかについて、話し合う。また、母親、父親にはどんな役割があるのか。その援助はどうしたらよいか(シングルペアレントの場合は?)を考える。

ブ参加者が、実際に取り入れやすいということ
で、非常に好評であった。このワーク例につい
ては、3回のワークショップ終了後も、CCB
研究会やワークショップ参加者による実践報告
を通じて、活発な意見交換が行われた。研究会
では、実際ワークをやってみて、経産婦と初産
婦を混ぜた教室にすると、どうしても経産婦に
引きずられる傾向があるので、グループを別に
したほうがよいという意見が出された。そして、
カードを用いるワークの応用としては、援助者
用、あるいは経産婦用をつくり、初産婦へのア
ドバイスとしても活用できるのではないかと、あ
るいは、同じ方法で産後の生活、例えば育児に
ついての役割分担を考えることにも使えるので
はないかというアイデアも提起された。また、
感情の変化については、カードの中に、バース
ラインの中でポジティブな感情を入れることによ
って、妊婦自身が抱いている出産イメージを
変えていく仕組みも必要ではないかという、実
践報告を通じた指摘もあった。しかし、他の実
践報告では、ネガティブな感情は、妊婦の出産
イメージに対してマイナスに作用するだけでは
なく、痛みに対する心構えという積極的な側面
をもっているという意見もだされた。こうした
実践や意見交換によって、今後さらなる応用も
期待できる貴重なワークとなった。

ワーク例（表4）は、子どもの視点から親
であることを問い直すワークである。ワークシ
ョップ参加者からは、兄弟姉妹の順番（一番上
の子ども、一番下の子ども、あるいは真ん中の
子どもなど）によって、親のかかわり方が違い、
子どもが傷ついたりすることがあるという意見
が、自身の経験に基づいて出された。このワー
クは、妊娠や育児についての情報が氾濫する中
で、軽視されがちな子ども自身が抱いている感
情やニーズに対して、親がどれだけ思いを馳せ
ることができるかが重要であるということをも、
経験的に理解できる好例であった。

2-3 援助観を問い直す - 変化の兆し

3回のワークショップは、援助者のコミュニ
ケーションモードの見直しと同時に、当事者へ
の伝え方の工夫、さらには当事者の声を引き出
す工夫など、援助者の援助のあり方を見直す基
本的作業が中心であり、オリジナルの「出産準
備教室」をつくりあげることをもって終了した。
夏目さん自身が対象に合わせてアレンジしたイ
ギリスで実施されているプログラムを体験し、
それぞれの現場で抱えている問題を共有し、解
決方法を考えるといった経験は、現場での援助
にすぐに役立つことでもあり、参加者の中で、
現場での自分たちの援助を変えていった人た
ちが出てくるようになった。

また、ワークショップ終了後、実際の出産準
備教室での実践報告がCCB研究会に寄せられ
た。報告によると、講義形式から、参加者自身
が考えるワークショップ形式に変えることで、
参加者が、自分の思いや疑問、意見を出しやす
くなり、同時に援助者も自分たちが何を援助し
たら良いのかが明確になるという、相乗効果が
生まれ始めている。また、そのことが、援助者
自身の援助することの喜びや自信につながっ
ている様子も伺えた。こうした実践報告は、ワー
クショップ参加者全員への『CCB研究会通信』
発行へと結実している。そして、ワークシ
ョップ参加者が、日本におけるPEの担い手として
活躍する上で、今回のワークショップが、援助
者同士の横のネットワークの構築の場になっ
たという成果が何よりも大きいといえるだろう。
これから現場で展開されていく援助が、周産期
やその後の子育てを通して、新しい家族形成に
対してどのように影響を与えていくのかは、今
後、こうした実践および研究双方の視点から検
討すべき重要な課題となるだろう。

おわりに

日本でも女性のライフスタイルは大きく変化し、子どもを産んでも仕事を続ける女性が増加し続けている。また、家族のあり方も変わりつつあり、仕事だけではなく、家庭や育児に自分の居場所を求める男性も、わずかながらではあるが、増えている。こうした変化にもかかわらず、日本の出産準備教室を中心とする周産期ケアは、「母子保健」という言葉に示されているように、ともすると母親の身体的健康や子どもの発達のみ傾向することによって、ジェンダー役割を強化するという、「意図せざる」社会的機能を果たしがちである。

また同時に、「母性愛」や、「パーフェクトベビー」といった「神話」にも縛られがちでもある。こうしたステレオタイプな理解が、女性の多様な出産スタイル、パートナー関係への援助、周産期における喪失経験(中絶、流産、死産)、子どもの障害といった分野への取り組みの遅れの一因ともなっているのではないだろうか。欧米にとどまらず、これからの日本においても、PEが果たす役割は、ますます大きくなるだろう。

注

- 1) 日本でも、1980年代以降、親業訓練協会などを中心として、欧米のPEが紹介され、講座が開講されている(Gordon, 1970=1998: クレアリー, 1998)。
- 2) 雑誌の特集として、「女性の産む力を引き出すケア」(『助産婦雑誌』, 2001)、「こころとからだの出産準備教育」(『ペリネイタルケア』, 2002)、「住民とともに進める母子保健計画の見直し」(『保健婦雑誌』, 2002)がある。
- 3) 主要なプログラムとしては、STEP (Systematic Training for Effective Parenting), ゴードン(T. Gordon)による親訓練法PET (Parent Effectiveness Training), ギノット(H. Ginott)の親教育, 交流分析(TA: Transactional Analysis), 行動療法などがある(田中, 1988)。

また1995年には、多様な子どもの状態(セクシュアリティ, 双子, ダウン症), 親の経済的地位や社会的状況など, ペアレンティングに関する包括的な事典(全4巻)が出版された(Bornstein, 1995)。2002年には、第2版(全5巻)が出版されているが、ここではペアレンティングに関する実践的論点の部分が独立した巻となった(Bornstein, 2002)。

- 4) Turney, Danielle, (2000).ここでは、「ネグレクト」が多くの場合、母親の問題として理解されており、こうした理解の背後にある、援助者自身が抱きがちな理想的・模範的ケアモデルとしての「マザーリング」神話が指摘されている。
- 5) 具体的には、子ども自身が持っている能力としての「resilience」の再評価という観点から、従来のアタッチメント理論の見直し作業が行われているが(Rutter, 1995: Svanberg, 1987), 詳細は別稿に譲りたい。また、親と子どもとの関係を、「間主観性」や「コミュニケーション」といった概念を用いて相互作用として捉えなおす試みもある(Everingham, 1994)。
- 6) 母乳育児に関しては、参加者からの反響が大きく、CCB研究会が2002年8月にアドバンスドコースとして再度開催し、施設と地域でのケアの連携について考える機会をつくった。

参考文献

- Bornstein, Marc H. (ed.), 1995, *Handbook of Parenting*, Volume 1-4, Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.
- Bornstein, Marc H. (ed.), 2002, *Handbook of Parenting*, 2nd, Volume 1-5, Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.
- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York: Routledge. (= 1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)
- Einzig, Hetty, 1999, Review of the field: current trends, concepts, and issues, in: Seila Wolfendale, Hetty Einzig (eds.), *Parenting Education and Support: New Opportunities*, London: David Fulton Publishers, 13-32.
- Everingham, Christine, 1994, *Motherhood and Modernity: An Investigation into the Rational Dimension of Mothering*, Buckingham: Open University Press.

- Fine, Marvin J., Steven W. Lee (ed.), *Handbook of Diversity in Parent Education: The Changing Faces of Parenting and Parent Education*, San Diego: Academic Press, 2001.
- Gordon, Thomas, *Parent Effectiveness Training*, 1970. (= 近藤千恵訳, 1998, 『親業: 子どもの考える力をのばす親子関係のつくり方』大和書房)
- Marshall, Harriette, 1991, The social construction of motherhood: an analysis of childcare and parenting manuals. in: Phoenix, Ann, Anne Woollett and Eva Lloyd, *Motherhood: Meanings, Practices and Ideologies*, London: Sage, 66-85.
- Long, Nicholas, 1997, Parent Education/Traning in the USA: Current Status and Future Trends, in: *Clinical Child Psychology and Psychiatry*, 2[4]: 501-515.
- Nolan, Mary, 1998, *Antenatal education: a dynamic approach*, London: Bailliere Tindall.
- Phoenix, Ann, Anne Woollett and Eva Lloyd, 1991, *Motherhood: Meanings, Practices and Ideologies*, London: Sage.
- Priest, Judy, et. al., 1991, *Leading antenatal Classes: A Practical Guide*, Oxford: Butterworth-Heinenmann.
- Rutter, Michael, 1995, Clinical implications of attachment concepts - retrospect and prospect, in: *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 36: 549-571.
- Svanberg, Per Olof G., 1987, Attachment, resilience and prevention, in: *Journal of Mental Health*, 7[6]: 543-578.
- Turney, Danielle, 2000, The feminizing of neglect, in: *Child & Family Social Work*, 5[1]: 47-56.
- 上野千鶴子編, 2001, 『構築主義とは何か』勁草書房
- 荻野美穂, 2002, 『ジェンダー化される身体』勁草書房
- 柏木恵子, 1993, 『父親の発達心理学 父性の現在とその周辺』川島書店
- 金井淑子, 2002, 「身体・差異・共感をめぐるポリティクス 理解的方法的エボケーと新たな倫理的主体」金井淑子・細谷実編 『身体のエシックス/ポリティクス 倫理学とフェミニズムの交叉』ナカニシヤ出版, 3 - 35頁
- エリザベス・クレアリー, 1998, 『「親」をたのしむ5つのスキル』築地書館
- 竹村和子, 2002, 『愛について アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店
- 田中マユミ, 1988, 「親教育の方法」岡堂哲雄編 『家族心理学の理論と実際 (講座 家族心理学 6)』金子書房, 148 - 170頁
- 田間泰子, 2001, 『母性愛という制度 子殺しと中絶のポリティクス』勁草書房
- 2001, 「女性の産む力を引き出すケア」『助産婦雑誌』55: 9 - 51頁
- 2002, 「こころとからだの出産準備教育」『ペリネイタルケア』21: 7 - 28頁
- 2002, 「住民とともに進める母子保健計画の見直し」『保健婦雑誌』58: 8 - 48頁

(2002.12.17. 受理)